周防大島中だより

HP アドレス http://www.sea.icn-tv.ne.jp/~sojhp/

10月

周防大島町立周防大島中学校
２０２３年１０月６日
■　第　６　号　■

学校教育目標：ふるさとを愛し、幸せな未来を拓く生徒の育成～自ら考え、判断し、行動する生徒～

特集！『二兎を追う』二学期に！

『二兎を追う』この言葉は、周防大島中学校生徒の２学期の目標です。二兎は「学校行事」と「学習（授業）」を意味し、それらの両立をねらった目標です。

２学期は、体育祭や文化祭の二大行事のほか、２年生の職場体験学習や広島研修など多くの行事があります。それらの行事を盛り上げ成功させるとともに、本業である授業にも手を抜かず「自らの成長につなげる」ことが、この目標の趣旨です。

第3回周防大島中学校体育祭が終わりました！

目標達成の第一歩となる「第３回周防大島中学校体育祭」は、９月１０日（日）に開催されました。この体育祭に向け、１学期末より準備を進めてきました。また、応援団や装飾係が夏休み中も登校し準備を整えてきました。２学期に入ってからも、容赦なく照り付ける日差しにも負けず、まさに体育祭スローガン「不撓不屈～燃えあがれ！島っ子魂！」を体現し体育祭当日に臨みました。そのような生徒の頑張りをねぎらうかのように、体育祭当日は比較的活動しやすい曇り空の好天に恵まれました。

競技においては、個人競技や各学年競技が行われ、生徒は楽しみながらも各隊の勝利に向けて懸命に競技しました。またそれぞれの役割と責任を自覚し係の運営に取り組む生徒の姿も見られました。

体育祭の終盤には、目玉といえる「隊演技（応援合戦）」が行われ、各隊共に工夫を凝らした熱い演出を披露し会場を魅了しました。最終種目の隊別リレーでは、白熱したレース展開で会場を沸かせました。

結果は、競技の部、応援賞共に鳳凰隊が勝利という形で幕を閉じました。歓喜に沸く鳳凰隊、涙を流す白虎隊と両隊の姿こそ異なりましたが、共に力を尽くし、悔いのないパフォーマンスを行ったからこその姿で、観ている方々に多くの感動を与えることができたのではないかと思います。

次は文化祭です。体育祭での学びを生かし、周防中生らしい素晴らしい文化を創り上げます。

第3回周防大島中学校文化祭（お知らせ）

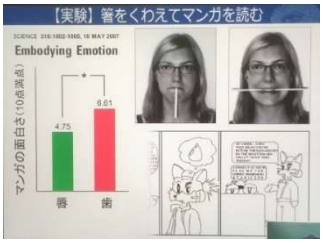
○期日：令和５年１０月２８日（土）　8:40～15:30（予定）

○主な内容：合唱コンクール、学年発表・展示、教科発表・展示、有志発表等

学習（授業）に取り組むために

学校行事の一つである体育祭での成果を糧に、生徒は次の行事となる文化祭に向け準備を始めると同時に、掲げた「二兎を追う」の目標達成に向け、勉強にも集中して取り組もうとしています。そのような生徒の想いに応えることができないかと、先日の全校集会で以下のような話をしました。

『二兎を追う』皆さんに私から二つお話しします。これは私が勝手に言っているわけではなく、脳科学を研究されている東京大学薬学部の池谷（いけがや）裕二教授の研究により科学的に実証されたお話です。



1　**学習を進めるためには“正しい表情と姿勢”から**

右の図は、割り箸を唇で縦にくわえた時（写真左）と、横に歯でくわえた時（写真右）の漫画の面白さの違いを比較した実験です。結果は、唇でくわえた時よりも歯でくわえた時の方が漫画の内容が理解でき面白く感じたそうなのです。この実験からわかることは何でしょうか。

被験者は、歯でくわえた時の方が明るく笑っている表情をしています（決して楽しいわけではありません）。つまり、**正しい表情や姿勢こそが、良い感情と良いパフォーマンスを作り出す**のです。

2．**“やる気”を起こすには**、どうすれば良いか

よく「“やる気”になるまで待つ」、「私は“やる気”になればできる」などの言葉を耳にしますが、“やる気”はどうやったら起こすことができるのでしょうか。

掃除を想像すればわかりやすいと思います。はじめから“やる気”になって掃除をするのではなく、（嫌々でも）掃除を行って知らず知らずのうちに一生懸命になっていることはありませんか？実は**“やる気”とは、行動の原因ではなく結果**であり、やり始めない限り“やる気”は起こらない仕組みになっているのです。

よって、できる人は“やる気”でなくシステムに従っています。つまり、行動する気分になるのを待つのではなく、行動する時間になれば粛々と始めるのです。

また、全校集会時には生徒指導主任からも体育祭での生徒の頑張りへのねぎらいの言葉と共に、「授業で大切にしたいこと」についての話がありました。キーワードは『聴く姿勢』について。“聴”の漢字のつくりの通り、耳で、目で、心できくことの重要性が話されました。そして、そのポイントが*２つ示されました。

*ポイントは、①正しい姿勢（背筋を伸ばす、体は話す人の方を向く）と②メリハリをつける（班活動は意欲的に、指示が出たら作業を止め話を聞く）ことです。

話す人やアプローチの仕方は異なっても、誰もが同じ方向性で生徒に語られることが大切であり、それができる本校の教職員体制をありがたく感じています。きっと学級でも、我々の話を咀嚼（そしゃく）しながら、それぞれの学年の子どもたちに理解しやすいよう、学級担任から同様の話がなされていることでしょう。

右の写真は、最近の授業風景です。生徒もその言葉の重要性を自覚し、意識して授業に臨む生徒が増えています。最初は慣れなくてつらい子もいるかもしれませんが、まず慣れることが大切。習慣化が形成されるのが（個別差はありますが）平均６６日と言われています（これも池谷教授の研究成果です）。長くても２ヶ月間頑張ることで習慣化できるということです。この継続をめざして、これからも本校生徒は目標を追い続けます。『二兎を追う者だけが二兎を得る！』